

中国貨幣の歴史

4 金属貨幣の発生 - 円錢 -



魏・「垣」



趙・「蘭」



秦・「重一兩十二一珠」

えんこうえんせん
円孔円錢



燕・「明化」



齊・「賧六化」



秦・「半兩錢」

ほうこうえんせん
方孔円錢

(写真は原寸)

えんせん かんせん
円錢 (環錢)

円錢は、中央に丸い孔のある「円孔円錢」と四角い孔のある「方孔円錢」の2種類がある。表面には、鑄造地名や重量・貨幣単位を示す文字が刻まれ、外周や孔の周囲には高くなっている「輪^{りん}」、「郭^{かく}」と呼ばれる部分がみられるものもある。裏面は、平板で文字などはない。

円形の金属貨幣である円錢（環錢ともいう）は、布幣、刀幣よりも遅れて戦国時代中期（紀元前4世紀頃）に登場した。

円錢の起源については、宝物・装飾品の一種である「璧」とする説、刀幣の柄の端にある環の形とする説、糸紡車の形とする説など諸説あるが、「璧」起源説が有力である。「璧」は、貝、石、玉などを素材として作られた中央に丸い孔がある平らな円形の財物で、殷の時代にはすでに富の象徴として珍重されていた。その後、青銅の「璧」も作られ、地金の重量を計って用いる秤量貨幣としても使用されるようになり、円形で孔があるという利便性もあって次第に小型・軽量化して円錢へ発展したと考えられている。

円錢には、中央に丸い孔がある「円孔円錢」、四角い孔がある「方孔円錢」の2種類があり、両者は実際の出土状況から異なる地域で流通していたことが知られている。また、円錢は、布幣や刀幣に置き換わったわけではなく、布幣や刀幣と並んで流通していたと考えられている。

円錢の出土状況から流通地域をみると、「円孔円錢」は黄河沿いの三晋地域（韓、魏、趙。現在の山西省と河南省北部および河北省の一部）、周（現在の洛陽市一帯）、秦（現在の陝西省）で、布幣の流通地域とほぼ一致する。一方、「方孔円錢」は刀幣が流通していた齊（現在の山東省）のほか、刀幣とともに布幣が流通していた燕（現在の河北省・遼寧省）などが流通地域とされている。

「円孔円錢」の表面には、「垣」、「共」（いずれも魏の都市）、「蘭」、「離石」（いずれも趙の都市）など鑄造地名を表す文字や、「重一兩十二珠」のように重量単位から貨幣単位へ変化していった「鉞」や「兩」・「銖」などの文字が刻まれている。布幣にも「鉞」などの文字が刻まれたものがあり、「円孔円錢」と布幣に記された単位が同じ重量を示しているものが存在することから、「円孔円錢」は布幣とともに流通していたとされている。「円孔円錢」の重量は、20g近い大きなものから5g前後の小さなものまで幅があるが、10数gのものが多く出土している。また、「円孔円錢」は、初期のものは孔が小さく、後期になるほど孔が大きくなる傾向がみられる。

「方孔円錢」の表面にも、「監六化」、「監四化」や「明化」、「一化」のように、「監」（齊の都市）など鑄造地名や、重量単位あるいは貨幣単位を示す「化」や「鉞」の文字が刻まれている。齊の「方孔円錢」には「化」の文字が刻まれ、刀幣・布幣の併用地域である燕の「方孔円錢」には「化」や「鉞」の文字が刻まれており、両地域ではこれと同じ文字が刻まれた刀幣も出土している。「方孔円錢」の重量は、「円孔円錢」に比べ小型で軽量なものが多い。

戦国時代は秦によって統一されていくが、秦はもとは西方の辺境に位置し経済的には後進国で、その勢力を拡大していくなかで諸国の貨幣制度や度量衡を取り入れ、独自の制度を整備していった。このため、秦の貨幣は、「円孔円錢」から「方孔円錢」へと変遷し、のちに度量衡の基準となる「半兩錢」と呼ばれる「方孔円錢」へと発展していく。

〔山岡直人、日本銀行金融研究所研究第3課〕

【参考文献】

王毓銓、『我国古代貨幣の起源和發展』、中国社会科学出版社、1990年

千家駒、『中国貨幣發展簡史和表解』、人民出版社、1982年

馬飛海・汪慶正編『中国歴代貨幣大系』 先秦貨幣 上巻、上海人民出版社版、1988年

山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年

山岡直人、「中国貨幣の歴史2 金属貨幣の発生 - 布幣 - 」、『金融研究』第22巻第2号、2003年

、「中国貨幣の歴史3 金属貨幣の発生 - 刀幣 - 」、『金融研究』第22巻第3号、2003年